

ジノヴィエフ演説（1）

倉 田 稔

目 次

はじめに
ハレ臨時大会まで
ジノヴィエフの演説
小 括

はじめに

本稿は、ドイツ独立社会民主党¹⁾ハレ臨時大会（1920年）でなされたゲオルギー・ジノヴィエフの演説を、紹介・検討する。ただし、紙数の関係上、その3分の1にとどまる。さて、ジノヴィエフについて簡単に紹介しておく。

ジノヴィエフ（Григорий Евсеевич Зиновьев, 1883～1936）は、本名ラドムィルスキー、ユダヤ系ロシア人、18歳でロシア社会民主労働党に入党し、1902年スイスに亡命、1903年スイスでレーニンと知り合い、同年第2回ロンドン党大会で、ボルシェヴィキ派ができてから、同派に属す。ベルン大学に学び、1907年第5回党大会で中央委員、1908年からレーニンに直接助力し、『プロレ

1) ドイツ独立社会民主党に関する文献

Die Freiheit. Organ der USPD. 1918-1922.

Die Internationale. Zentralorgan der USPD und Organ der VKPD. 1920.

Eugen Prager, *Geschichte der USPD*. Berlin 1922 2te Aufl.

Robert F. Wheeler, *USPD und Internationale*. Frankfurt Berlin Wien 1975.

David W. Morgan, *The socialist left and the German Revolution*. London 1975.

Berlau, *The German Social Democratic Party, 1914-1921*. N. Y. 1970.

Protokoll der USPD.

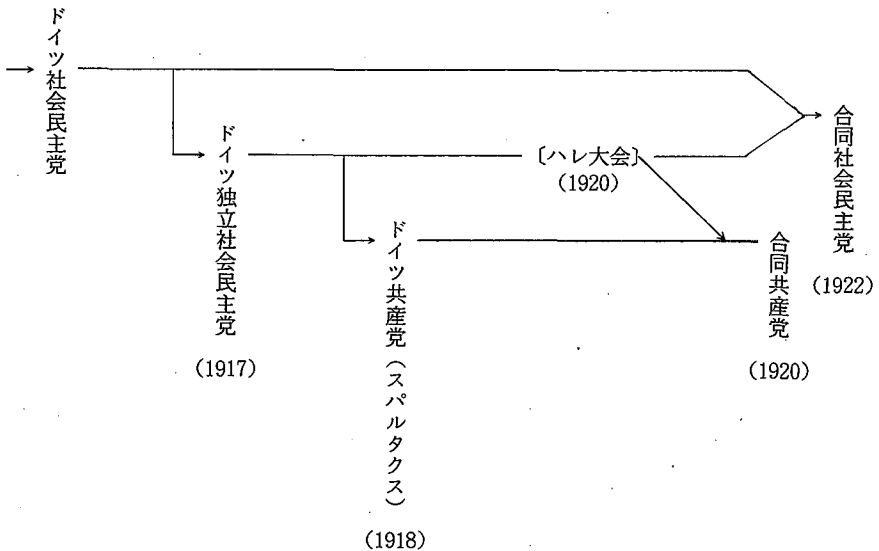
森戸辰男『最近ドイツ社会党史の一齣』同人社、1925.

タリー』、『ソツィアル＝デモクラート』の編集に参加した。第1次大戦勃発後、レーニンの「副官」として活躍し、論文集『流れに抗して』（*Gegen den Strom*, Hamburg 1921）と小冊子『社会主義と戦争』（*Sozialismus und Krieg*, 1915）をレーニンと共作で出す。ツィンメルヴァルト（1915）とキエンタール（1916）の会議に、ロシア社会民主労働党ボルシェヴィキの代表として、レーニンと共に参加した。1917年2月革命後、レーニンらと共に、ドイツ経由で「封印列車」により帰国、新聞『プラウダ』の編集、ペトログラード・ソヴィエトで活動する。10月にレーニンの武装蜂起戦術に反対、それを新聞に出したため、除名されかかる。10月革命後、12月にペトログラード・ソヴィエト議長（1926年まで）、1919年に共産主義インタナショナル（コミンテルン）執行委員会議長（1926年まで）になり、第1回から第5回まで主宰した。1926年7月まで、ロシア共産党の中央委員会政治局員であった。その後、スターリンに権力を奪われ、無実であったが1936年銃殺された。著作集全9巻あり。*History of the Bolshevik Party*, New York 1973（ロシア語初版はモスクワ、ペテログラード 1923年）、『レーニン主義研究』三一書房 1975年、*N. Lenin*, Berlin 1920などの著作がある。

ハレ臨時大会まで

ドイツ社会民主党は、第一次大戦に協力したため、そのうちの左派つまり反戦・平和主義勢力が、1917年に分裂し、ドイツ独立社会民主党を結成した。新党は、おおよそ、同党主流派、革命的オププロイテ、スパルタクス団、からなっていた。独立社会民主党は、1918年のドイツ革命の主力となった。ドイツ革命後、スパルタクス団は、1918～19年に、ドイツ共産党（スパルタクス団）を創立した。次図で、ドイツ社会主義政党の系図を示しておこう。

ドイツ独立社会民主党に属した有名な人物を挙げる。まず、党首フーゴー・ハーゼ（Hugo Haase, 1863-1919）である。かれは、1919年11月に暗殺された。エドゥアルト・ベルンシュタインは、1919年1月蜂起の直後、USPDを離党して、社会民主党へ復帰した。したがって両名は、ハレ大会には居ない。



その他政治家や理論家として有名な者は、ディットマン (Wilhelm Dittmann, 1874-1954), カール・カウツキー (Karl Kautsky, 1854-1938), ルードルフ・ヒルファディング (Rudolf Hilferding, 1877-1941), クリスピエン (Arthur Crispian, 1875-1946) らである。

USPD は、勢力を伸ばしていた。1920年6月の国会選挙で、同党は第2党になった。全国会議員459名中に84名を占めた。しかし、この大政党は、まもなく崩壊するのである。原因は内部分裂であった。党内は右派と左派から成っていたが、両派が決裂したのである。これに手をかしたのは、コミンテルンであった。

1919年3月2日に、国際共産主義者会議が、モスクワで開かれた。会議には、21ヶ国、35の組織を代表する代議員52名が出席した。ドイツ共産党も加わった。その代表はフーゴー・エーバーライン (Hugo Eberlein, 1887-1940) である。ただし、前日の予備会議で、かれは、共産主義インタナショナルの即時創立に反対している²⁾。

2) 『コミンテルンの歴史』上巻, 大月書店, 1973年, 43ページ。

ここに代表参加した各国共産党は、ロシア共産党を除けば、ほとんど創立されたばかりであった。だからこの会議は、各国の左派社会民主党や共産党が、思想的・組織的に強化され、レーニン主義の理論に立つのを助力することが、任務であった。

共産主義インタナショナル（コミンテルン）はこのときまで正式に創立されていなかった。会議の綱領的文書が採択され、3月4日に新しい代議員たちがおくれて到着してから、第三インタナショナル＝コミンテルンの正式結成が議題となった。ドイツ共産党エーバーラインは、戦術的に時期尚早であると、再び反対している。しかし、かれ以外の代議員が賛成し、コミンテルンが正式に発足した。執行委員会議長にジノヴィエフが選ばれた。代表たちは帰国してから、コミンテルンに加入申請することになった。

国際共産主義者会議は、こうしてコミンテルンという存在になったが、実は余り念入りにつくられたのではなかった。たとえば、各国組織がコミンテルンへ加入する条件（つまり規約）などは、この後につくられる。

この大会と同じ頃、2月3日～8日に、ベルンで、右派社会民主主義の諸党が、第二インタナショナル再建会議をひらいた。いくつかの左派社会民主党と並んで、ドイツ独立社会民主党は、これに絶縁声明を出した。

コミンテルン第1回大会に派遣した各国共産党・左派社会主義党以外に、新しく諸国に共産党が結成されはじめ、諸国の左派社会党などは、コミンテルン加盟を声明しはじめた。

コミンテルンは、各国共産党に物心両面の「援助」をおこなった。諸党は歴史が若く、また、コミンテルン側の心配は、改良主義的なイデオロギーと運動から十分手を切っていない組織が、コミンテルンに加盟することであった。この問題は、第2回大会で、加盟条件の決定によって解決しようとするのである。

一方、重大な問題が、戦後の混乱の中から共産主義者の中に発生して来た。それは、セクト主義、教条主義である。これが払しょくされないかぎり、大衆的な共産主義運動は望めないと考え、レーニンは、『共産主義内の「左翼主義」小児病³⁾』を書いた。これは、ドイツ共産党から分裂した「左派」⁴⁾への批判

でもある。レーニンが主張する。共産主義者は、反動的な労働組合であってもそれに参加すべきである。ブルジョア議会に参加すべきである。どんな妥協もしないというのはばかげている、と。

コミンテルン第2回大会には、37ヶ国の67の組織を代表する217名の代議員が出席し、7月19日～8月7日、開かれた。ドイツ独立社会民主党の代議員も参加した。ディットマン、クリスピエン、ドイミヒ (Ernst Däumig)、シュテッカー (Walter Stoecker, 1891-1939) の4名であった。同党左派は、ドイツ共産党と立場が近かった。つまりドイミヒ、シュテッカーがそうである。

大会の最大の課題は、各国に新しい型の、つまりレーニン主義的なプロレタリア党をつくり強化することであった。ここでは、とくに一つの点、コミンテルン加入問題だけをとり上げよう。これは、21ヶ条からなっている。要約しておく、コミンテルン加盟党の義務として、

- 1) 共産主義の宣伝をする。
- 2) 労働運動の責任ある地位から改良主義・中間派を排除する。
- 3) 合法・非合法活動を結びつける。
- 4) 軍隊への宣伝をする。
- 5) 農村地方で煽動する。
- 6) 社会・平和主義などをばくろする。
- 7) [後掲]
- 8) 植民地解放闘争運動を支持する。
- 9) 労働者組織内で活動する。
- 10) アムステルダム・インタナショナルに反対する。
- 11) 党議員団を点検し、党幹部会に従わせる。
- 12) 民主集中制に基づく。
- 13) 時どき党員の再登録をする。

3) 『レーニン全集』第31巻、大月書店、1965年、所収。編者によれば、レーニンはこれを、1920年4月～5月に執筆、6月に単行本として発行、とある。

4) ドイツ共産党左派。

- 14) すべてのソヴィエト共和国を無条件に支持。
- 15) 新しい共産党綱領をつくる。
- 16) コミンテルン執行委員会の決定に従う。
- 17) 名称変更つまりコミンテルン支部を名乗る。
- 18) コミンテルン執行委員会の重要公式文書を公表する。
- 19) 以下略

第7項は、問題なのであげておこう。

「コミンテルンに加盟を望む諸党は、改良主義と『中間派』の政策と完全かつ絶対的に手を切る必要を認め、このような絶縁をできるかぎり広くその党員に弁護する義務がある。……

コミンテルンは、こうした絶縁ができるだけ速やかに実現することを無条件かつ絶対的に要求する。コミンテルンは、あの悪名高い日和見主義者、トゥラーティ、モディリアニ、カウツキー、ヒルファディング、ヒルキット、ロンゲ、マクドナルド等がコミンテルンのメンバーのように見える権利をもつ、ということに同意できない。それはコミンテルンが、多くの点で、すでに分解してしまった第2インタナショナルになることでしかない。⁵⁾」

この「21ヶ条」は、大半がレーニンの起草になる。コミンテルン大会では数日前の会議で、規約が採択されていた。規約は、普通、加入条件そのものといってよい。これにつけ加えてまた、21ヶ条の「加入条件」をきめたことは、奇妙に見える。しかし、レーニンらが左派社会主義政党に対して厳格にかつ用心ぶかく対処したことをあらわすものである。第7)項に見られるように、とりわけ、名指しをしてまで、中間派の排除をねらっている。ドイツ独立社会民主党に対しては、同党がその右派を排除して、コミンテルンへ加入せよと、呼びかけているのである。

この加入条件は、審議の後、2票の反対で採択された。

1920年10月12日から17日まで、ドイツ独立社会民主党の〔臨時〕大会がハレで行なわれた。これは USPD の命運を決する大会となった。395名の代議

5) デグラス編『コミンテルン・ドキュメント』I, 現代思潮社, 1969, 148ページ。

員に9名の外国代表が加わった。この当時 USPD 党員は89万3923名であった。

大会の議事は次のとおりである：

中央指導報告（ルイーゼ・ツィーツ）

統制委員会報告（W. ボック）

コミンテルンと加盟条項（A. クリスピエン, E. ドイミヒ, W. デイットマン, W. シュテッカー〔つまり、コミンテルン第2回大会参加者全員〕）

ここで、コミンテルン加盟の是非についてはげしい討論が起き、2つの決議が出された。シュテッカーとドイミヒの決議がその1つで、加盟賛成案、レーデブルとローゼンフェルトの決議がもう一つで、加盟拒否案であった。コミンテルン第2回大会に参加した4名の独立社会民主党員が報告し、その後、外国来賓として招かれたジノヴィエフが登壇した。

ジノヴィエフの演説

コミンテルン執行委員会議長ゲオルギー・ジノヴィエフは、割れるような拍手をうけ、ドイツ語で演説をはじめた。1920年10月14日である。かれは、コミンテルン執行委員会代表としての資格であった。かれは大略次のように語った。

※ ※ ※

メンシェヴィズムは、ボルシェヴィズムと同じく、国際的現象である。諸君は、メンシェヴィズムに賛成か、ボルシェヴィズムに賛成か、はっきり決めなければならない。諸君の党には、統一できない2つの傾向がある。諸君は、2つの傾向の間で、つまり、改良主義か共産主義かを、決断しなければならない。もし我われが共産主義の下に固く団結していれば、労働者階級は、もう明日にもブルジョアジーを倒せるほど強くなっているという状況である。労働者階級自身が思想的に方向づけられることが、肝心である。誰がブルジョアジーを救っているのか？ いわゆる社会民主主義者である。決定的問題で、つまり世界革命の問題で、原則的な意見の相違がある。革命運動が一時的に過ぎ去っているという、USPD の右派議員団の指導者の意見は、偶然ではない。ロシ

アで体験したのも同じ争点であった。……1905年〔ロシア〕革命が敗北したとき、わが党の右派、メンシェヴィキがこう言った。革命は敗北し、それを承認すべきであり、合法的社会民主党を作り、改良活動をしなければならない、と。ボルシェヴィキは、革命は死んでいない、革命はもう一度やってくる、という意見を主張した。我われはこの理念に忠実でありつづけた。クリスピーエンは言った、「……ドイツだけでなく、あらゆる国で、〔18〕48年ブルジョア革命後に似た状況がある」と。1848年の後、革命が不可能な大変長い期間がきた。今もその時期だと、彼は考える。それは、U.S.P. の右派の全政策を特徴づける傾向である。いったい今、労働者階級の全政策を、世界革命が近いと期待してはならないことに、本当にあわせるべきなのか？ そう考える根拠は全くないと、思う。明日か明後日に完全な勝利が保てると言うつもりはない。ただ諸君に要請したいのは、世界革命を組織的に宣伝し準備することである。この党大会でも、どこでも、我われは社会主義革命に賛成だが、その前提条件を欠いていると、人は言う。プロレタリア革命の経済的条件は、全ドイツにあるのか？ 経済的条件つまり主要事項はあると言う。だが、ヒルファディングとカウツキーは、主要事項は、いかなる状況でも生産が乱されずにいることだと、いつも説明している⁶⁾。これはまさに革命へのおそれである。主要な事は、〔革命の〕経済的前提条件があるということである。カウツキーは、〔かつて〕共産主義を組織して革命を待つべきだと書いた。諸君の代表者は、生産社会主義を説いた。だがどんな生産か？ 社会主義的にか、資本主義的にか？ 諸君が

6) この発言に対し、ヒルファディングはこの会議で「私はそう言ったことがない。」と叫ぶ。ジノヴィエフは「たしかに、経営協議会の会議で言った。」と答え、ヒルファディングは「違う、違う」と言った。この点を確かめておこう、ヒルファディングは、第1回全国経営協議会大会、1920年10月5日の報告、Die Sozialisierung und die Machtverhältnisse der Klassen で演説している。

「ドイツとヨーロッパ全体にとって、まったく疑いないことは、社会化が生産の継続を確保するという条件を満たさねばならないことである。」(FR. ヒルファディング、現代資本主義論 新評論、45ページ)「我われの社会化の方法は、生産の上昇をもたらすものでなければならない。」(同、46ページ)文字どおり、ジノヴィエフの言ったようには、ヒルファディングは語っていない。しかし、ジノヴィエフの言った事は、的はずれではないと言えよう。

まず資本主義を助けてそれから倒すとするなら、それは国際的改良主義の根本的誤りである。ヒルファディングは、戦前では、十大銀行を強制すれば十分であり、そうすれば社会主義だと、『金融資本論』で書いたし、ベーベルも同じことを発言した。社会主義がごく容易に来るだろうと考えた。だが戦争が、その目論見をつぶした。戦争は、社会主義を20年早めたかもしれない、しかし労働者が飢え欠乏し、長い内乱を耐えるという形態を与えた。それは好ましくはない、しかし、他に道はないのだと理解すべきである。

カウツキーは、戦前まだ革命家するとき、プロレタリア革命が今はもう早すぎることはないと言った。今や同じカウツキーが、諸君はプロレタリア革命を早期にやろうとしすぎていると言う。プロレタリア革命は、真にマルクス主義的共産党以外のものによっては行なわれない。

経済的条件はある。しかし何が欠けているのか？ 我われ独自の階級の精神的方向づけがないのである。なぜか？ 資本主義的發展のためである。つまりブルジョアジーから受けた教育によっている。だから全世界の労働者階級を、精神的にブルジョアの影響に服させず、精神的に自らの足で立つよう、方向づけることが、我われの任務である。

さて、労働組合インタナショナルは何か？ これは、崩壊した第2インタナショナルの破片である。今、ブルジョアジーの唯一の要塞である。国際ブルジョアジーは、革命に気をつけろ、信頼を寄せるな、とは、単純に言えない。だが労働組合インタナショナルは、それがやれる。ブルジョア国防軍、自衛軍は、労働組合インタナショナルの指導者より、危険ではない。レギーンやジュオーの支配しているアムステルダム・インタナショナルを支持するならば、プロレタリア階級を精神的に結集させることはできない。

この党大会は、また他国の状態を注目せねばならない。イタリアで数週間以來プロレタリア革命のはじまりがある。とくにイギリスの事態の發展を見よ。行動協議会 Council of action の創設が1つの始まりである。これはソヴィエト、第2政府のはじまりだった。世界史的意義をもつ轉換がイギリス労働者階級におきている。この運動の頂点に、有名なイギリスの改良主義者たちが立っ

ている。だからその運動は再び衰えた。しかし客観的に、その運動は意義を損わなかった。あらゆる国でそれは一定期間同様に進む。人びとがメンシェヴィキ的であっても、ボルシェヴィズムを支持するにちがいない。我われの戦術と見解の方に、道徳的正しさがあるからである。我われは、最大の希望を、メンシェヴィキが一般的に頂点で勝利している労働者階級にも置いている。

イタリアやイギリスでは、新しい時代の震動、つまりプロレタリア革命の開始が明らかに見える。オーストリアでも明日、ソヴィエト政府がつくられる。ブルガリアで、我われは、合法の方法で、ほとんど多数派をボルシェヴィズムの方に獲得し、ユーゴスラヴィアで同様である。だからバルカンはプロレタリア革命の成熟した果実である。ハンガリーで反動はまた永久に支配しないであろう。またドイツでも革命は死んでいない。それゆえ我われはインタナショナルを持つべきであり、国際世界革命を目標とした戦術をとるべきである。

第2のきわめて重要な問題は、民主主義の問題である。ディットマンは、我われは「独立社会民主党」という名前を守りたい、なぜなら民主主義は独裁の後でも存続するであろうから、と言った。たしかに独裁は一時的過渡的現象である。だがこれまで全インタナショナルは、USP、少なくとも右派指導者たちが民主主義の基盤に立っていることを知っていた。それは今までのことだった。

プロレタリアートの独裁の問題をいくつか述べたい。今問題なのは、肉体のかるプロレタリアート独裁であり、我われのつくった形態であり、国際労働者階級の創ったプロレタリアート独裁の歴史的な形態、つまりソヴィエト制度である。それはロシアとすべて同じである必要はないし、他国の労働者階級は、おそらく我われより良く作るであろうと、常に我われは言ってきた。それでもソヴィエト政府は、プロレタリアート独裁の歴史的に与えられた形態である。今問題なのは、エルフルト綱領ですでにこれを予見していたことではなく、ドイツ労働者階級がすでに1月の日々に、またハンガリー労働者階級がその道に導いた意味で⁸⁾のプロレタリアート独裁に賛成すべきかどうかを言うことで

7) 1919年の1月闘争。

ある。

以上の三つの主要問題、とくに世界革命かどうか、全戦術がそれに合うように作られるべきか、民主主義の問題そして最後に独裁の問題にいかんして関わるか、について我われは諸君とともにお互いに進もう。

〔コミンテルン加入〕条件が、はじめモスクワではゆるかったが、厳しくなって鋭くなったと、言われた。その唯一の理由はこうである。プロレタリア革命というまさに運命的問題で、我われと右派 USP の代表者との間に統一はないという印象を、話せば話すほど持ったからである。問題は、純粹に原則的問題である。我われはお互いに動揺していたし、余りに簡単に考えていた。同時に第2の発展過程が平行に走っていたようだ、つまりクリスピーエンとディットマンは、我われが革命的ロマンティカーだという見解に達していた。

今まで〔コミンテルン加入〕条件の組織面だけが語られていた。それはまた大変重要であるが、ずっと重要なものは、テーゼつまり基礎問題である。諸君が〔加入条件を〕21ヶ条でなく、18ヶ条にしたいということは、我われを分裂させるものではない。もし分裂がやってくるとすれば、諸君が世界革命、民主主義、プロレタリアート独裁の問題で、別の考えであるから、起きる。それは討議されねばならない。その後でのみすべてが理解される。

社会民主党の新聞は、ブハーリンと私、つまりロシア労働者階級の抑圧者がドイツへ行った、と書いている。だが、我われが本当にプロレタリアートに対し独裁を行い、専制者であると、諸君が考えているなら、諸君が我われを招き、我われとの統一に努めるという良心に責任がもてなくなる。どこからこの混乱した状態が来るのか？ 諸君がこれら決定的問題についてまだはっきりしていないからである。指導部と指導の人びとに、無数のニュアンスがある。数人の指導者は改良主義に賛成し、プロレタリアートの独裁を信じない、そして3つの決定的点で我われと反対である。それゆえ、我われは党大会で、全世界の労働者階級に話している。諸君の第3インタナショナルへの合併の問題は、諸君の党大会に属している。この問題はモスクワの「命令」によって決定されずに、

8) ハンガリー・ソヴィエト共和国革命のこと。

ハレで、ドイツの労働者階級の一部の代表者によって決定される。今日諸君の傍に一部労働者は、〔第3〕インタナショナルの方へ来るであろう。全世界の労働者階級が、民主主義、独裁、第3インタナショナルの問題で、すでに確信していると思う。もう障害はないので、決定に至るにちがいない。

ここで、クリスピーエンのふれた原則的本性の問題に入る。報告でかれは、組織問題だけを語ったのではない。かれは3つの原則的問題を、だが余り重要でない問題をとり扱った。第1の問題は農業問題、ついで多民族問題、第3にテルロの問題である。そしてレーテ体制である。それは4つの原則的問題である。

まず農業問題。クリスピーエンは、モスクワの第3インターの提起した農業綱領が、ドイツでは反革命を強め、プロレタリア革命をおし進めないことに適するだけだと、説明した。その農業綱領がドイツだけでなく、全インタナショナルのために考えられていることに注目すべきである。これは大変重要な要素である。

ハンガリーを例にとる。ハンガリーの同志は、社会化し大規模生産を行なうべく大土地所有を温存しようとし、中農に何も与えようとしなかった。それは誤りであった。ベラ・クン、ヴァルガ、ハンガリー共産党のすべての指導者が今、公式に確認した。ハンガリーでは労働者階級は層がうすく、圧倒的に農民階級である。革命が来たが、ハンガリー農民階級は、何か変わったとは感じていない。農村では全てが古いままだった。頂上には、ベラ・クン、プロレタリア政府が立っている。しかし、農民は土地を得なかった。これはひどい誤りだったし、だからこの農民の中間層は、プロレタリア革命に対し、無関心で耳を傾けない。

イタリアをとりあげよう。中小農民は土地を没収しはじめた。それは革命の部分現象である。ドイツでもそうなるであろう。

ドイツの独裁は、農民レーテ〔協議会〕なしに勝利できるか？ かれらは、労働者一兵士レーテだけでなく、農民レーテを形成せざるをえないであろう。無論、我われはまず、農村労働者に近づき、そこでしっかりした地歩を占めねばならない。農民層に対しても同じである。ロシアのように大変若い国に当て

はまるなら、ドイツではなおさらである。小農民の組織なしには、いつの場合でも、プロレタリア革命は長く勝利してられまい。なぜなら、農民層を含まなければ、運命的な誤りを冒すことになり、つまりそこで反革命を準備することになる。

メンシェヴィキとの闘いでも、同じ問題があった。同じ政治的方向を、ちがった事情の下で、右派 USP に見出す。

クリスピエンの誤りはどこから来るか？ かれが、プロレタリア革命の展望を全く真面目にとらないからである。だからかれは、農民が我われに属さない、なぜなら農民は社会主義者ではないから、と考える。主敵は農民ではない、ブルジョアジーだ。

農民問題に関する我われのテーゼで、次の結論を出した。必要なところでは、ラティフンディウムと大土地所有の一部を小農民に配分することができる、と。それは絶対正しいし、絶対に可能である⁹⁾。今、ロシア以外の全ての国にとって最重要問題は、ブルジョアジーを支持しないことである。なぜなら、かれらは敵であるから、それに、我われはまさに小農民を持たねばならない。革命直前、メンシェヴィキは、純粹にプロレタリア党の役を演じた、つまりプロレタリアートの利益を代表すると主張し、農民層に譲歩しなかった。本当のプロレタリア独裁があり、労働者階級にパンを提供するよう富農に強制でき、またしななければならない今は、事はすべてがちがってしまった。それで我われはまた、農民を抑圧していると言われた。我われはしかし、つねに、プロレタリア革命の担い手は、都市と農村のプロレタリアートである、と主張するだろう。革命の1段階で達成すべきことは、まさに受入れねばならない。農民層の一部を中立化し、諸君はソヴィエト共和国のもとでより良くなると確信させるべきである。

＊ ＊ ＊

9) このとき、クリスピエンは叫んだ。「それは、生産の後退だ、中世へ戻る！」

小 括

紙数の都合上、ここで稿を打ち切る。ジノヴィエフ演説は、まだ続く。かれの演説をここで、概括しておきたい。

コミンテルンの中心党となったロシア共産党は、この当時、世界革命を望んでいた。それが、コミンテルンの方向を規定したし、ジノヴィエフ演説にも出ている。共産主義の下に固く団結していれば、労働者階級は、ブルジョア階級を倒せるほど強くなっているという発言は、極めて甘い認識である。世界革命が近いと見る考えも、歴史のあと知恵として言えば、誤りである。ドイツにおいて1919年1月闘争のチャンスを逃してからは、ドイツには革命の可能性は、ほとんどなかった。労働組合インタナショナルの指導者より、ブルジョア国防軍、自衛軍は危険ではないという説は、無茶苦茶である。イタリアやイギリスに革命の芽を見ようという姿勢も、全く、眼がくもり切っていて、ユートピア的である。

農業問題に関するジノヴィエフは、概して正しい。またドイツへの言及も正しい。つまり、ドイツで、農民レーテを形成しなければならないという主張は、もしドイツで革命をおこすつもりであれば方針としては正しい。なお、残念なことは、ボルシェヴィキ政権は、戦時共産主義の時代に、農民を抑圧せざるをえなかった。

コミンテルンを結成すること自体は、決して誤りではない。しかし、コミンテルンは、戦略・戦術の上で誤りを冒した。つまり、コミンテルンが活動を開始しはじめた時、世界革命の可能性、より正確に言えば、世界の数ヶ国における可能性が、失われはじめた。こうして、ロシアにおける現実を基礎とした展望は、ロマンティックな戦術となった。この方針は、短期的にはなく、長期的に考えるべきものであった。後にスターリンはこれを逆の方向へとねじまげる。

ジノヴィエフは、つづいて、民族問題に論を移す。